

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

タバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）保毒状況と防除対策（技術情報第6号）について（送付）

タバココナジラミのCCYV保毒状況とウリ科野菜の退緑黄化病に対する防除対策について取りまとめましたので、ご活用下さい。

記

ウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）の保毒虫数（誘殺数×保毒虫率）が多く、退緑黄化病の発生リスクが高いため、防除対策を徹底しましょう。

ウリ科野菜栽培主要3地域（熊本、鹿本、菊池）で、ウリ科野菜の退緑黄化病の発生リスクを判断するため、8月上～中旬のタバココナジラミの誘殺数およびCCYVの保毒率を調査した。

1 調査結果

- 1) 黄色粘着板（10×10cm）に誘殺されたタバココナジラミは、3.0頭/日/枚で、平年（過去3ヶ年の平均1.3頭/日/枚）に比べて多かった（図1）。
- 2) 黄色粘着板に誘殺されたタバココナジラミのCCYVの平均の保毒虫率は25.3%で、平年（過去3ヶ年の平均26.1%）並であった（図2）。
- 3) 退緑黄化病の発生リスクの指標となる保毒虫数は0.84頭/日/枚で、平年（0.32頭/日/枚）より多く、調査を行っている5年間の中で最も多かった（図3、表1）。

2 防除対策

CCYVの保毒虫数が多く発生リスクが高いため、下記の対策を徹底する。

栽培前のほ場

- 1) これから定植するほ場では、タバココナジラミを栽培ほ場に「入れない」対策を徹底する。施設のサイド開口部に目合い0.4mm防虫ネット、谷換気部に目合い1mm以下の防虫ネットを被覆する。すでに被覆しているハウスについては、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無い点検し、必要に応じて補修する。
- 2) 定植2～3日前に、「育苗期後半」に登録のある薬剤を処理する。育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。また、定植前処理剤の効果が低下する定植20～30日後に成虫に効果の高い薬剤を散布する。
- 3) 育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にタバココナジラミが寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。

栽培中のほ場

- 1) タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策を徹底する。現在栽培中のほ場では、栽培終了まで、タバココナジラミの防除を継続して行う。
- 2) タバココナジラミを施設外に「出さない」対策を徹底する。栽培終了後は直ちに密閉処理を行い、ほ場内のタバココナジラミを死滅させる。露地栽培などの密閉できないほ場では、成虫に効果の高い薬剤で防除したうえで植物残さを早急に片付ける。

共通

- 1) 施設内の発病株や周辺の野良生えは、重要な伝染源となるので除去する。
- 2) ウリ類周年栽培地帯におけるメロン退緑黄化病発生リスクは、5月から12月まで高い水準で推移する（[農業研究成果情報 No. 597\(平成 25 年 5 月\)ウリ類周年栽培地帯でのメロン退緑黄化病発生リスクの季節変動](#)）ので、今後も防除を徹底する。

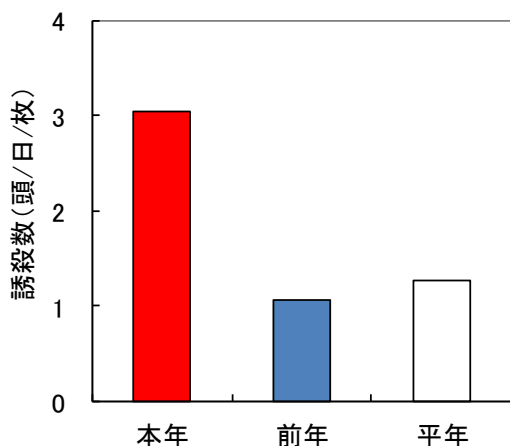


図1 ウリ科栽培地帯に設置した黄色粘着板によるタバコナジラミ成虫誘殺数

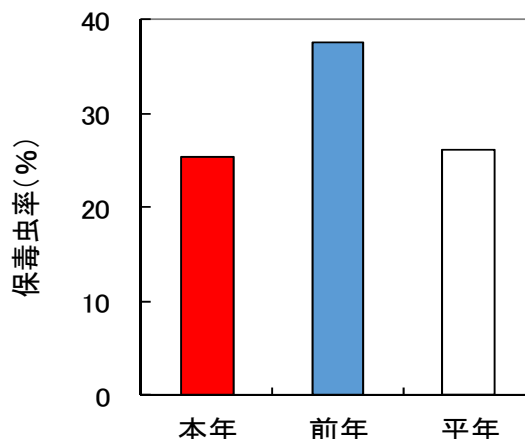


図2 粘着板に誘殺されたタバコナジラミ成虫のウリ類退緑黄化ウイルス保毒虫率

黄色粘着板（10×10cm）をウリ科栽培地域に6～10日間、1地点当たり5枚設置。誘殺数は、1枚当たりの1日の誘殺数（頭/日/枚）。調査地域は3地域。※平成27年のみ2地域。平年値は、過去3年の平均

黄色粘着板に誘殺されたコナジラミをRT-PCRにより検査し、保毒虫率（保毒虫/検定数）を算出。検定数は1地域当たり50頭。※調査地域及び平年値は図1に準ず。

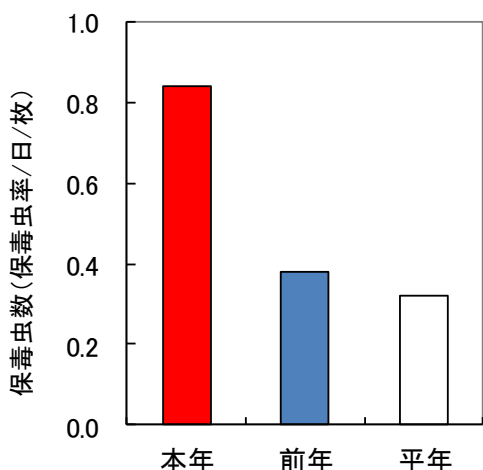


図3 ウリ科栽培地帯のタバコナジラミ成虫の保毒虫数

表1 各調査年の保毒虫数

| 調査年 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 | 平年(H26～28) |
|------|------|------|------|------|------|------------|
| 保毒虫数 | 0.15 | 0.22 | 0.36 | 0.38 | 0.84 | 0.32 |

保毒虫数（保毒虫/日/枚）は、誘殺数（頭/日/枚）×保毒虫率（保毒虫/検定数）。※調査地域及び平年値は図1に準ず。

熊本県農業研究センター 生産環境研究所
 病害虫研究室 予察指導係（病害虫防除所）
 担当：斉藤、坂本 TEL：096-248-6490